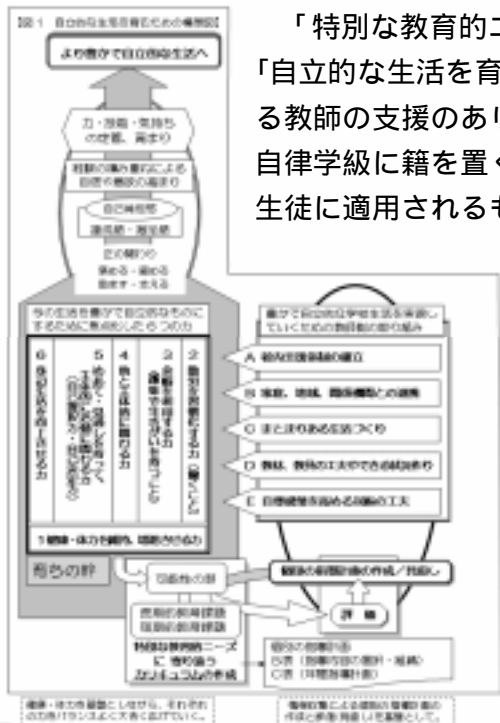


特別支援教育研究委員会

1 研究テーマ

一人ひとりの生活を豊かにし、自立する力を育てる支援のあり方
 ~ 通常の学級で学習する、特別なニーズを持つ児童への支援 ~

2 研究課題



「特別な教育的ニーズを持った児童生徒への支援のあり方」として、図のような「自立的な生活を育むための構想図」を作成し、学校生活での学習・生活場面における教師の支援のあり方について研究を進めた。現在進められている特別支援教育は、自律学級に籍を置く児童生徒だけでなく、特別な教育的ニーズを持つすべての児童生徒に適用されるものであるという立場でとらえていくことが必要である。その場合、通常学級と自律学級の連携がより綿密に要求されるという点において、校内の支援体制の充実が課題となると考える。

研究校の栗ガ丘小学校ではこのようなとらえから、以下の項目に視点をおき、研究を進めていった。「めあて・見通しを持って、主体的に活動に関わる力」は、通常の学級での授業（交流学习を含む）の場において、より効果的にその力を伸ばすという考えのもと、個の実態に合わせた「D、できる状況作り」や「E、自尊感情を高める指導の工夫」の支援方法を探る。通常の学級での授業分析に基づいた、評価（＝児童理解）と「支援のあり方」を考察する。「教材、教具の工夫やできる状況作り」に焦点をあてる。そのために、児童の特性を理解した教材化の工夫や、学習の場の工夫を行い、

通常の学級の児童の関わり(関わらせ方)や教師の支援を、状況作りの方法・手立てとしてとらえ直す。通常の学級での年間指導計画にあわせ、C表をより具体的なものにしていく。また、B表において、「原学級との交流学习」として位置づけられている教科での学習を明確にする。単元の目標に準拠した評価（評価基準による評価）とその時々の評価を明確にしていく。などを柱として、特別な教育的ニーズを持つ児童への支援のあり方について研究を深めていただいた。

3 指導の実際

(1) 研究推進校および授業データ

期 日 平成17年10月12日(水)
 会場校・授業学級 栗ガ丘小学校 4年3組(男子14名 女子17名)
 教科および単元名 体育「ミスターからの挑戦状」(マット運動)
 授業者 小山武蔵 教諭

(2) 子どものニーズのとらえ

研究校では、特別なニーズを持つ児童への支援について、「個別の指導計画(A表)」作成において、日常生活の姿をとらえるために、「今の生活を豊かで自立的なものにするために焦点化した6つの力」を児童理解の窓口として位置づけた。

- 例) 日常生活の姿
- 1、健康・体力を維持、増進させる力
 - ・クレヨンや鉛筆を使って線を引いたり、塗りつぶしたりすることができる。
 - ・短なわとびで担任と向かい合って飛ぶことができる。
 - 4、他と主体的に関わる力
 - ・自律学級の朝の会では、自ら司会役を行い、大きな声ではっきりと挨拶ができる。
 - ・困ったときには、教師に助けを求める関わり方ができる。

(3) 授業分析を中心とした児童理解～評価と支援

自己決定力や社会性など、自立していく力をつけるために、その子をどうとらえ（児童理解）、授業をどう構想していくかを研究の重点とした。授業の構想とは、評価と支援のあり方であり、

1時間の授業の中で支援するときに、教師はその時々の子どもの姿をどう把握してどう支援するのか、目標に準拠した評価(評価規準による評価)をどう行い、その評価からどう支援していくのか、である。

例)	評価(姿のとらえ)	支援の意図	支援のあり方
	友の動きをじっくり見ている姿を把握して、	自分から体を動かしているように、	その姿を共感的に認めていく。
	できた姿や課題について練習をする場を設けているか否かを把握して、	運動に意欲的に取り組んでいけるように、	できたこと認める声かけをしたり、課題に向けた練習の場を設けるように指示したり、自律学級でやった練習方法をやるように促したりする。
	本児のこの時間の評価規準に照らして評価し、	自信を持っていくように「本時つける力を保障するために」	おおむねできていると評価したときは、共感的に認め、励ます声かけをする。(Cと評価した時は、予備のてだてをしていく)

4 この事例から明らかになったこと

- ・その子のとらえ（児童理解）と授業の構想（評価と支援のあり方）に重点を置くことで、「教材の工夫」や周囲の友の関わらせ方を含めた「できる状況作り」が焦点化され、有効な支援につながっていくこと。
- ・特別なニーズを持った子どもたちには、それに合わせた授業のねらいやつけたい力があるわけだが、今回のような通常の学級の中での学習では、本人のニーズを考慮しながらも全体の単元目標に準拠した評価規準を設けることで、授業の中での支援の方向がより明確になる。また、周囲の子どもたちの学習のめあてとより近いものであるため、周囲の子どもたちもかかわりの視点を持ちやすく、支援する子供たちの学習も保障されること、また、対象児にとっても同様の課題に取り組む満足感や集団の一員としての意識も得られる。
- ・周囲の子どもたちがかかわり、通常の学級で学習ができる、運動ができる、他と関わる事ができる、という事自体が、自己選択の結果であり、社会性の育成につながっている。また、通常の学級で学習できる、とは、すなわち、友との関わりがあって「できる」、友に見守られる中で「できる」、自信を持てたから「できる」のであり、それは『より豊かで自立的な生活を育む』ためのプロセスを追っていることにも注目したい。
- ・通常の学級と自律学級の連携を密にし、通常学級の担任が個の特性や障害を十分に把握し指導計画を作成したり、自律学級で予備～補充学習を行ったりする事で円滑な学習の場作りが可能となった。

5 来年度への課題

- ・構想図の見直しや更新をしていく。また、「6つの力」育成のための手立てが見える研究にしていく。
- ・児童理解の仕方、評価と支援について、さらに内容を深めていく。
- ・6つの力の手立てと関わり、1つの力を、1年間の教育課程の中で諸教科諸単元と関連付け、「力の育ち」を目的としたカリキュラム(またはC表)の作成をする。
- ・可能ならば、来年度も「特別な教育的ニーズ」を広くとらえ、「通常の学級における学習の支援」「通常の学級と自律学級との連携」に焦点を当てていく。
- ・研究校だけでなく、各委員が実践を持ち寄り、構想図の検証、見直し、修正をしていく。また、「6つの力」を育成していくためにそれぞれの手立てが見えてくるような研究にしていく。